飛鳥宮跡活用検討委員会(第７回)議事の概要

日　時：平成30年3月29日(木)　14時00分～16時15分

場　所：奈良県文化会館

出　席：委員長　田辺　征夫

委　員　黒田　龍二、小林　牧、櫻井　敏雄、菅谷　文則、染川　香澄

寺西　和子、仲　隆裕、松村　洋子、森川　裕一

（欠席：田島委員、古瀬委員、増井委員）

事務局　奈良県公園緑地課

関係課　奈 良 県　南部東部振興課、文化資源活用課、平城宮跡事業推進室

文化財保存課

明日香村　総合政策課、文化財課

【歴史的風土・景観の保全について】

○景観の議論をまとめていくときには、情緒に訴えることも大事なので、優れた文化人や芸術家などに、情緒を高めていくような情報発信をしてもらう取組も重要だと思う。また、構想や計画を策定し実行していくときには、国等の様々な審議会で検討されることになるが、こうした審議会の専門家の委員の中にも情報発信力の高い情緒派の人がいるので、意見が収束するようなストーリーを考えておかないといけない。

○歴史的風土・景観保全の方針のところで、現在の材料で造られた建築やアスファルト舗装の道路などの景観と調和させるという誤解を与えないよう、「遺構の表示等を行うことにより新たに創られる古代を彷彿とさせる景観と、現存する歴史的風土・景観との連続性が保たれるよう配慮する」と修正してはどうか。

○最近、「クマノザクラ」という品種が新たに認定されたが、ぜひ「アスカザクラ」を探して、明日香村に行くと「アスカザクラ」が見られるというようにしてはどうか。山奥にポツンと佇むヤマザクラが大変美しく味わい深いので、そういう景色を各所に創っていければよい。

○川原寺に立派なイチョウの木があるが、イチョウは平安時代の初めに遣唐使が持ち帰ったもので、飛鳥時代にはなかった。しかし、今ではすっかり景観の中に落ち着いている。飛鳥時代そのままの景観という訳ではなく、長い時間をかけて現代に受け継がれてきた景観にも見どころはあり、心地よく感じられるということを了解していれば、これから計画を立てる際にも柔軟に対応できる。

○歴史的風土・景観保全の方針のところに並んでいる写真について、何を主張しているのかがわかるように大きさや配置に変化をつけて、内容に強弱をもたせたほうがよい。

【遺構の表示について】

○遺構の表示、復元にはいろいろな手法がある。本来、飛鳥時代の建物に使う木材は高野槙だが、現代においてはそんなに大きく立派な高野槙はどこにもない。つまり、完全な復元は到底不可能なので、計画を作っていく際には、多少融通のきくフレキシブルなものにしたほうがよい。

○建造物の修理において、全てを創建当初の状態に戻すことはほとんどない。奈良時代の建築には、鎌倉時代や室町時代の修理に使われた部材も残しながら、いい塩梅に落ち着かせている。

○2030年まで10年以上あるので、「復元の対象となる建物や手法については、今後も引き続き発掘や調査研究を行い、学術的検証を経て決定する」というスタンスでよい。固定化しすぎると身動きが取れなくなる。

○遺構の表示にツゲの木を用いる方法は、昭和40年頃に奈良県が考えたものだが、他にも様々な方法があると思う。建物を完全な形に復元するのではなく、床面まで復元してステージや休憩スペースとして活用するというのはよい発想だと思う。また、平城京の第一次大極殿の前面がガラス張りになっているのは、四天王寺を参考にしたもの。規制の考え方が厳しかったら、できなかったかもしれない。そういう手法をこれからいろいろ考えて、十数年かけて実際に決定すればよい。

○進化する活用を考えて、この構想にも「新たな知見に基づく改良を容易に行えるようなものとする」と記述している。今後、より具体的な計画を作っていく段階で議論しなければならない。また、一旦計画を策定しても再度見直す必要が生じるかもしれない。できるだけ柔軟に考えることが大切だと思う。

○遺構表示の取組イメージとして、掘立柱塀(宮の領域)表示と活用が示されているが、塀に開けた窓の用途として、ARなどの技術を用いて古代の景観を楽しむことなどを記述したほうが意図がはっきりする。

【活用に関する記述について】

○祝祭や行催事については、明日香村内だけで完結するのが望ましいのかもしれないが、例えば壬申の乱に関わって愛知県と連携するとか、大極殿のつながりで京都や現在皇居のある東京都とも連携することが可能。飛鳥が中心となって全国各地と連携する気概を持てば、より素晴らしい計画になると思う。

○活用例の中で、「地下に存在する遺構の様子や意味を来訪者に分かりやすく伝える」とあるが、方法としてはなかなか難しい。例えばギリシャのお土産で、何枚かのシートを順番に重ねていくと景観が過去から現在に変化していくというものがあったが、これから活用の計画を作っていく中で、土産物ひとつにしてもしっかりと考えていかなければならない。

○「飛鳥宮跡の意義・価値を広く世界に発信する」ための手法として、たくさんのコンテンツが盛り込まれているが、情報発信の技術や手法はどんどん進歩するので、「こういうことも考えられる」という程度の緩やかな書きぶりにしておくほうが後で困らない。要は、学術的にしっかりした情報を上手に広く発信することが基本。

○「飛鳥宮跡をわかりやすく伝えるための拠点施設（ガイダンス施設）」と「周辺の歴史文化資源等とのネットワーク」を表す地図内の「拠点施設」という表現が重複しているので、混乱を避けるために表現を分けるべき。

○明日香村を丸一日かけて周ってみたが、改めて素晴らしい所だと思った。ただ、ガイドや詳しい解説なしにその素晴らしさを分かってもらえるようにするのはまだまだ難しいとも感じた。

○飛鳥の歴史をじっくりと学べる講座の開設など、ソフト事業も展開してほしい。しかも多言語での展開が望ましいと思う。

【追加・修正等】

○「歴史的風土・景観の保全の方針」の記述を、「飛鳥宮跡の活用においては、遺構の表示等を行うことにより新たに創られる古代を彷彿とさせる景観と、現存の歴史的風土・景観との連続性が保てるよう配慮するとともに、飛鳥宮跡活用の取組全体が地域を活性化し・・・」と改めるとともに、写真についても、何を表しているかわかりやすいものに差し替える。

○「情報発信のための多種多様なコンテンツをつくる」の箇所で一項目削除。

○「飛鳥宮跡をわかりやすく伝えるための拠点施設をつくる」を、「飛鳥宮跡をわかりやすく伝えるための拠点としてガイダンス施設を設ける」に修正。また、「拠点施設（ガイダンス施設）」を「ガイダンス施設」に改めるほか、関連する目次や見出し等も修正。さらに「周辺の歴史文化資源等とのネットワーク」を表す地図内の「拠点施設」は、「ネットワークを形成する既存施設」に修正。

○「遺構を表示する」の「掘立柱塀（宮の領域）表示と活用」の説明を、「窓をのぞくとARによる古代の景観が楽しめる」に修正。

【基本構想の了承、今後の展開】

○7回の検討を経て、上記の修正を加えたうえで、委員会として基本構想が了承された。

○平成30年度は、飛鳥京跡苑池と一体的に検討するために、委員会の改編を行い、「保存活用計画」の策定に着手する。